HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ民族をめぐる「分断」と「連帯」 : 石原真衣『〈沈黙〉の自伝的民族誌』をめぐって
Author(s)	辻, 康夫
Citation	北大法学論集, 72(3), 227-242
Issue Date	2021-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82833
Type	departmental bulletin paper
File Information	lawreview_72_3_09_Tsuji.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

アイヌ民族をめぐる「分断」と「連帯」

―― 石原真衣『〈沈黙〉の自伝的民族誌』をめぐって ――

辻　　康夫

1.

本書は、アイヌの出自を持つ若手研究者による、画期的な研究である[1]。著者の母方の祖母はアイヌであったが、著者はその出自にどう向き合うべきかがわからず、しかもその感情を他人に理解されないことで、苦悩を深めた。著者はこの苦痛の原因を明らかにすることを研究テーマにすえる。自らの出自をたどり、アイヌをとりまく社会の歴史的変化をあとづけ、多様な学問領域の知見をてがかりにしつつ、自らの苦悩の由来を探求する。本書は10年間におよぶ真摯な研究の成果である。困難な課題にとりくみ、本書を完成させた著者の努力に敬意を表したい。独創的かつ重厚な業績であり、アイヌ問題についての理解を大きく前進させるものである。もっとも、平易な文体と、明快にみえる論理にもかかわらず、その提起する問題の深みを理解することは容易でなく、また著者の主張には論争性もはらまれている[2]。本稿では、本書の内容を概観したのち

[1] 石原真衣『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー） ― サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会、2020年。

[2] そもそも、本書は、著者の語りが〈ほとんどの人に理解されない〉理由を探求するものであるから、容易な理解を許すはずはない。また本書の提供する情報は極めて豊かであり、これを無理に整合的な理論の鋳型にはめていないから、複数の解釈をゆるす箇所も多い。しかも著者によれば、アイヌに関心や知識を持つ人ほど、彼女を誤解する傾向があるとされる。逆に言えば、アイヌ問題に

に、限られた範囲ではあるが、いくつかの論点について考察を加えてみたい。本書を理解し議論するうえでの一助となれば幸いである。

本書の第１章は、序論であり、著者が本書のテーマに取り組む経緯が説明される。著者の母方の祖母はアイヌであり、また著者はアイヌの出自をもつ親戚とも家族ぐるみの親交があったが、アイヌという言葉は、家庭の中でもタブーであり、決して語られないものであった。著者は、12歳のとき、母からアイヌの出自についての事実を知らされるが、同時に母は、それを十分な理解を持った人以外には明かさないようにと忠告する。著者が抱えることになったこの秘密は、著者の心に重くのしかかる。著者は、両親の配慮で、十分な教養と知的能力、社交性を身につけ「あふれる自己肯定感」を育みつつ成長する。職業人としても自信を獲得した20代の半ばになって、著者はいよいよ自らの出自を隠し続けることに耐えられなくなり、親しい友人に打ち明ける。その際、善意の友人たちが、著者をただちに「アイヌ」とみなしたことに、著者は驚き、ショックを受けることになる。すなわち、和人として生きてきた著者は、アイヌの祖母をもつことだけで、ただちに、アイヌと見なされたことに強い違和感をもったのである。この体験は著者を悩ませ、著者は自らの出自の意味を知るために、仕事を辞し、大学院に入る。大学院では、民族や先住民をめぐる理論を学んだが、著者の状況は改善しなかった。著者は「アイヌ」「和人」の二つの出自を持ち、二つのどちらにもアイデンティティを持てないでいたが、周囲の人々はこのような意識を理解せず、多くは著者が「アイヌ」のアイデンティティにコミットすることを期待した。こうして著者は再び沈黙を余儀なくされる。著者は苦悩の末に、自らの声が他人に聞き取られないという「沈黙」を研究のテーマにすえる。すなわち、本書の問いは、なぜ人々が、アイデンティティについての著者の語りを理解せず、了承しないのか、というものである（p.59）。

ついての理解が乏しければ、著者のメッセージを理解できたように感じながら、その問題の深みを見落としている危険があるともいえるだろう。いずれにせよ私の理解力は限られるが、他方で、アイヌ問題に関心をもつ研究者として、著者が心血を注いだ本書への応答の責任を感じざるを得ない。本稿では、その責任の一部を果たすために、私の能力の範囲で暫定的な応答をおこない、それを超える部分については、著者との対話を続けることにしたい。

第２章では、著者の言葉が聞き届けられない理由を説明するための分析枠組みが検討される。著者は、様々な研究領域の、多様な研究に手がかりをもとめる。文化人類学の理論からは、「表象」の問題をとりあげ、研究する側とされる側、描く側と描かれる側の非対称性について考察する。ポストコロニアル論からは、植民地的支配の歴史が、マイノリティ集団のメンバーのアイデンティティ形成に与える影響の分析がとりあげられる。また、発言のための場にアクセスできず、その抵抗が認識されない「サバルタン」の概念によって、著者自身の立場の理解を試みる。また、「分類理論」を援用しつつ、社会が二項対立にあてはまらないアノマリーを暴力的に排除する力学を考察する。著者は、これらの理論のそれぞれから固有の洞察を引き出しつつ、理解不能性を主題化する、「沈黙論」の可能性を提示する。

第３章は、オートエスノグラフィーの方法論についての考察である。本書は、著者自身の体験を研究の対象に据え、著者の家族・親戚を協力者とする。著者は、マイノリティ研究において、マイノリティ当事者の視点から研究を行う一群の研究手法が展開されつつあることを指摘し、本研究をその一環として位置づける。このような観点から、「ライフヒストリー」、「オートエスノグラフィー」、「当事者研究」の方法論が検討される。これらはいずれも、主流派研究者が自らの視点からマイノリティを研究するという非対称性を克服し、マイノリティ自身が研究のイニシアチブをもつことをめざしている。本書のテーマの研究には、このようなアプローチが求められるのである。

第４章、第５章は、本書の中核部分であり、曾祖母から著者にいたる４世代の人生が、オートエスノグラフィーの手法によって記述される。第４章では、曾祖母から、著者までの人生が描かれる。曾祖母はアイヌの自己完結的なコタンで生きたが、祖母は幼少期から和人の農家に奉公に出て、コタンに戻ることはなかった。小学校にも通えず、幼少期から過酷な肉体労働の日々を過ごした彼女は、和人社会に入ることで経済状態を改善することを選択した。アイヌの文化を放棄し、和人の男性と結婚し、子供たちがアイヌ文化に近づくことも望まなかった。著者の母は、周囲からはアイヌと見なされていたが、アイヌ文化を継承しなかった。一時期は、アイヌの言論活動や、アイヌ文化の学習に携わったこともあるが、挫折に終わり、その後は沈黙することになった。第４章を通して、以上のような、祖母と母の体験が、著者のコメントを交えながらたどられる。これをとおして、著者が、祖母や母の人生を受け止めて生きており、そ

れが著者の意識を大きく規定していることが示唆される。

第５章は、著者自身の体験を記述する。著者はカミングアウトをするにあたり、アイヌか和人かを「一方的に規定されずに、自分の出自に関して、自然に周囲の人びとに伝えることを望んでいた」(p.129)。しかし、そのような願望は実現せず、著者は自己の出自と真剣に向き合わざるを得なくなる。著者はそのために北海道大学の大学院に入学するが、そこにおいて、人々に理解されない苦悩はいっそう深まることになる (pp.143-147)。著者は「アイヌ」「和人」のどちらにも仲間意識を持てず、この二分法を拒み続けたが、この姿勢が周囲の人々に受け入れられず、彼らをいら立たせ、著者を孤立させる。著者は長い模索の後に、自らを「サイレント・アイヌ」と規定する。「サイレント・アイヌ」は、その出自やアイデンティティについて語りたくても語れない人をさす。すなわち、支配的な認識枠組と衝突するがゆえに、その声が人々に理解されない(p.162)。「自己をアイヌととらえ、アイヌとして生きようとする人々」、および「自己をアイヌとして捉えながらも、その出自を隠しながら生きる人びと」(「隠れアイヌ」と称される)、のいずれとも区別される存在である (p.163)。これらの人々と、「サイレント・アイヌ」は、同じ歴史過程に由来する不利益を受けつつも、そこから生じた困難・苦痛のあり方が異なっている。自らの位置をこのように整理したうえで、著者は両者の分断を架橋する方向を見出すに至るのである。

第６章では、北海道アイヌ協会の機関誌などを素材に、アイヌ民族の自己規定の変遷がたどられる。著者の分析によれば、戦前は、アイヌは主流派と同等の地位に登るために自己を変革することをめざしたが、戦後になると、世界的なマイノリティの運動に触発されて、「少数民族」としての自己主張を行うようになる。その後、国際的に「先住民」の概念が展開するなかで、アイヌもこれによって自己規定するようになる。このような自己規定が、アイヌ民族の支配的なイメージを定着させる一方で、著者のような存在がここから排除されることが述べられる。最後の第７章では、本書全体の理論的主張がまとめられている。

以上、本書の内容は、方法論から歴史まで多岐にわたり、そのすべてが本書の目的とかみ合っている。いずれの章もよく練られ、貴重な洞察がちりばめられている。第４章および第５章は、祖母・母・著者の体験をつづるが、これを明確な問題意識によって整序しつつも、無理に鋳型にはめ込んでいないため、情報量が豊かで、民族誌としての価値がたかい。また、同化の圧力のなかで生

きた著者の祖母や母の苦悩をあとづけ、さらにそれが著者に対して持つ意味を示唆することで、和人による北海道支配の意味や、アイヌが被った影響について、新たな示唆を与える。著者がアイヌ・支援者・友人たちと交渉・交流・衝突する記述からは、今日のアイヌをとりまく状況の一面が、通常の民族誌とは異なる角度から照射されている。第６章は、限られたアクターについての分析ではあるが、アイヌ民族の自己定義の変遷について、有益な示唆を与えてくれる。

2.

以上、本書の全体を概観したが、以下では、本書の与える知見を手がかりに、政治理論を専攻する私の視点から、いくつかの問題提起をしてみたい。本書の核心の問いは、二つの集団のいずれにも、同一化できない著者の生き方を、周囲の人々が了承しないのはなぜか、という点にある。この問題を考えるためには、両者の側の意識の理解が必要である。一方には、どちらにも同一化しない生き方にこだわる著者の意識があり、もう一方には、著者の説明をうけいれず、著者に「アイヌ」としての生き方を求める、周囲の人々の意識がある。本書は、第一の「本人」の生き方について、第４章、第５章のオートエスノグラフィーによって説明している。第二の「周囲」の思考原理については、第２章、および第６章が、多様な理論装置によって解明を試みている。私自身は、「周囲」の側に属する人間であるので、はじめに第二のトピックをとりあげ、若干の考察を付け加えてみたい。その後に、本書の開示する洞察に依拠して、第一のトピック、「本人」の生き方の理解を試みる。最後に、これをふまえて、著者がたどり着いた立場が、両者の間の理解と和解につながる可能性について考えてみたい。

周囲の人々が「アイヌでも和人でもない」という著者の立場を了承しない理由として、著者は、「分類理論」によりつつ、「アイヌか和人か」を峻別する二分法が、人々の認識を拘束していることをあげている。この点は適切な理解であると思われるが、われわれは、考察をさらにすすめる必要があろう。「分類」が、「秩序や構造」と結びついているとすれば（p.181）、この二分法を維持している秩序・構造とはどのようなものなのだろうか。

一般に民族集団の境界は、文化や歴史の共有にくわえて、共通利害や実践的

関心によって、形成・維持される。たとえば、政府が、一群の人びとを劣等な地位に落として権利を制限する場合、それらの人々の間にしばしば集合的なアイデンティティが作り出される。あるいは、インフォーマルな差別によって、集団間の移動が妨げられ、これによって境界が維持されることも多い。さらには、抑圧されたマイノリティが権利回復のために連帯し運動する場合にも、これが集団の凝集力を強化することがある。世界の先住民集団は、これら様々な理由によって、集団としての凝集力と境界線を維持してきたといえる。それではこのような「実践的関心」の共有という視点から、アイヌのアイデンティティ・境界のあり方はどのように考えられるであろうか。

著者のカミングアウトに触れた「周囲の人々」は、いくつかのグループに分けられる。第一は、著者との関係が特に親密ではなく、アイヌ問題についての関心も高くない人である。これらの人の示す反応は、「あなたがアイヌでも気にしない」という発言や、「デリケートなものに出会ってしまった混乱」や、「知る限りのアイヌ文化やアイヌの著名人に関する知識」を「かなり無理やり」に披露する、という態度である（p.131）。これらの反応は、いずれも、アイヌに対する差別や偏見が社会に存在することを前提に、自分がそれを受け入れておらず、したがって、著者に対する悪感情をもたないことを示すための善意のものであろう。著者が当初、カミングアウトによって交友関係が壊れることを危惧していたことを考えれば、これらの友人たちの行動も、あながち的はずれとは言えない（p.135）。一般に、主流派のメンバーが、差別された集団のメンバーと接触するときに、善意を確認するこのような儀礼的な行動をしばしば行うのであるが、このような体験は、かえって著者に、和人との間に存在する深い溝を認識させたのである[3]。

第二のグループは、著者とより親密な関係にある夫や友人で、かつ、「アイヌのことについて、ほとんど何も知らない」人々である。これらの人々は、著

[3] E. アンダーソンは、白人女性である自分が、路上で面識のない若い黒人男性と会った時のぎこちない体験を記している。アメリカ社会には、若い黒人男性を「犯罪者」とみなすステレオタイプが存在しており、初対面の二人は、はじめに、このステレオタイプを受け入れていないことを、確認し合わなければならないのである（Elizabeth Anderson, *The imperative of integration* (Princeton University Press, 2010, p.53).

者の声に耳を傾け、数年たつうちに、著者の苦悩を理解してくれるようになったという（p.176）。

第三のグループは、アイヌ民族の当事者、研究者、支援者である（pp.148-149）。これらの人たちは、「アイヌの問題について深く考え、アイヌ民族に好意的な眼差しを向けてきた」人びとである（p.256）。著者によれば、「アイヌ民族の未来について、真剣に考える人ほど、アイヌも和人も」著者の語りに強く抵抗するのである（p.264）。

ここに、大きなパラドクスが存在するようにみえる。アイヌの事情を熟知したこれらの人は誰でも、アイヌの出自が多様であり、アイデンティに揺らぎがあることを知っている。また一般に、「混交」「ハイブリディティ」などの観念は、学界に広く流通して常識になっているから、本質主義的な民族の観念を持つ研究者はほとんどいない。もちろん、これらの人びとは、差別・支配の手段として、民族の境界を維持しようとするわけでもない。それにもかかわらず、これらの人々が、最も強く二分法にこだわり、著者の語りを撥ねつけるのは、なぜなのだろうか。もう一つのパラドクスは、このような無理解の人びとに、著者はなぜ近づく必要があるのか、という点である。逆にいえば、アイヌについて「ほとんど何も知らない」人びとは、より簡単に著者の語りを受け入れるのであるが、これらの人々は、いかなる意味で、著者の苦悩を理解するのであろうか。

これらのパラドクスについて考えるにあたって、はじめにアイヌにおけるアイデンティティ選択について理解する必要がある。私の理解では、今日のアイヌの若者にとって、出自をめぐる態度は、親や祖先から受け継ぐものであるとともに、選択の対象でもあることが少なくない。著者自身、母親からアイヌの出自を知らされたときに、つぎのような言葉をかけられている。「日本人とアイヌの両方の血を引くのだから、どちらに属するのか選択するのは自分」であるというのである（p.124）。母は「自分で色々経験して大人になったとき、その答えを自分で見つけるしかない」と付け加えたという（p.127）。このような言葉は、著者の家庭にかぎらず、よく聞かれるもののようである。混血の進んだ今日の都市部では、アイヌの出自を知られずに生きることが可能になっている。他方、あえて出自を隠さずにアイヌとして生きようとすれば、著者の母が恐れたように、「差別」「同情」「好奇心」などにさらされる可能性がある（p.126）。しかも、自らに不利益が及ぶことを恐れて、近親者のカミングアウトを快く思わない人もいる。兄弟の一部がアイヌを選択し、他の兄弟はアイヌを隠す、な

いしは、和人として生きることを選択する例も多い。このような状況のなかで、アイヌとして生きようと思うならば、どこかで自覚的な選択をして、これらの不利益に直面する覚悟をかためる必要がある。アイヌとしてカミングアウトするに際しては、偏見や差別を撥ね返せるように、アイヌの歴史や文化を学ぶ人も多い。文化実践は、主流社会に根強く存在する偏見や差別と闘う手段としても機能しているのである。

以上の前提をおいて考えれば、著者の体験に説明がつく部分が多い。著者の接したアイヌや、アイヌを支援する研究者たちは、著者の苦悩の源泉が、「アイヌとして生きるか」「アイヌを隠して生きるか」「和人として生きるか」という選択をめぐる迷いにあると、誤解したのではないかと思われる。実際、このような迷い自体は、アイヌの出自を持つ人々において頻繁におこるものだからである。

「アイヌとして生きる」ことは、アイヌを取りまく困難に直面して、連帯することを意味する。祖先から受け継いだ文化を保全する責任、アイヌとして堂々と生きられる社会を子供たちに残す責任を感じて活動する人も多い。これらの人々は、著者が「自信をもって」アイヌとして生きることを「選択」し、自分たちと支えあって生きることを望み、著者を勧誘したのであろう。また、「アイヌを選択しないなら、日本人になれ」(p.527) という発言も、このような脈絡におかれれば、勧誘に応じない著者へのいらだちとして、理解しうると思われる。本書によって、著者の「サイレント・アイヌ」としての生き方についての理解が進めば、周囲のこのような誤解は薄らぐと期待される。

3.

つぎに、アイヌにとっての、「文化」実践の意味を考えてみたい。本書は「文化」を、著者とアイヌを分けるものとして、重視しているからである。一般に、世界の先住民集団において、同化政策によって破壊された伝統文化の維持・復興への願望は強く、権利回復運動の中心に据えられることが普通である。伝統文化の実践を通じて、人々は、祖先、コミュニティ、自然、土地とのつながりを確認し、それらとの関係のなかでで生きる意味を見出すのである。このような文化的ニーズに加えて、文化復興には様々な実践的関心が結びつく。先住民の文化において、儀礼や、漁撈・狩猟を通じた土地や動植物とのつながりは、

きわめて重要であるが、これは特定の土地への権利や、漁業権・狩猟権の回復を要求する根拠となる。

また今日、経済のグローバル化や脱工業化の中で、先住民コミュニティは、貧困、失業、アルコール・薬物中毒、犯罪、自殺、教育崩壊などの、社会病理に陥りやすい。このような中で、人々に生きる道を示して自尊心を回復させ、コミュニティの規範を再建するうえで、文化復興はしばしば重要な手段となる[4]。

文化復興にはこれら多様な動機が存在するから、先住民による文化の表象が、時に一定の戦略性を持つことは確かである。しかしながらこのことは、文化帰属やアイデンティティが、主観的にも、個人および集団の生を方向づける、重要な意味を持つことと矛盾しない。ポストモダンの理論は、文化の表象やアイデンティティが権力関係によって構築されることを指摘し、その恣意性を強調する傾向にあるが、これらが当事者にとって持つ意味を軽視する危険がある。本書が雄弁に示したように、文化帰属やアイデンティティは、大切な人々やコミュニティなど、多くの人びとへの連帯や責任を感じながら選択されるものである。個人は、これらに規定されながら、選択を繰り返すことで、人生を形作ってゆくのである。

コミュニティの実践する文化には、言語、宗教、親族組織、職業倫理など、様々な要素があり、これらは相互に強化しあう関係にある。その一つが失われても、集団のまとまりが直ちに失われるわけではなく、また、それを実践しないメンバーが、直ちにメンバーとしてのアイデンティティを失うわけではない。しかしながら、ひとつの文化要素が失われれば、それは他の文化要素の低下にもつながり、集団の凝集力を低下させ、その行為主体性を弱める。マイノリティ集団の多くは、伝統の継承、社会病理の克服、差別の解消など、喫緊の課題に直面しており、集団としての行為主体性を必要とすることを考えれば、文化を振興する強い動機が存在することも多い。

アイヌとして生きる人々にとっても、文化は重要な意味を持つ。著者の指摘するように、「自分たちの文化を共有できる仲間と集まったり、歌ったり、踊ったり」することは、よろこびをもたらす。また、「様々な形で抑圧されてきた

[4] この点については、以下の拙稿を参照いただければ幸いである。辻康夫「後期近代におけるコミュニティ再建」『北大法学論集』69-4（2018年）、同「コミュニティ再建と行為主体性」『北大法学論集』69-6（2019年）.

人びとが、心の拠り所として、仲間たちが集まる場所や、それまで差別の対象であった文化を、自分たちが取り戻し、自尊心を回復するということには、大きな意味がある」(p.142)。これに加えて、前述のように、文化実践は主流社会に根強く存在する偏見や差別と闘う手段としても機能している。アイヌとして生きることを「選択」して、カミングアウトするに際しては、偏見や差別を撥ね返せるように、アイヌの歴史や文化を学ぶ人も多い。実際のところ、アイヌ文化の担い手のなかには、その活動をとおして、差別のない社会をつくることを願う人も多い。子供が学校でアイヌ文化の価値を学んだことで、親がはじめて子供にアイヌの出自を伝えられたという例もある。

それでは、文化復興を重要な共同事業と位置づける先住民族は、これを好まないメンバーに不快な思いをさせるゆえに、その排他性を批判されるべきなのであろうか。民族にとっての文化の意義については、それぞれの民族の自己決定にゆだねられざるを得ないが、一般論としては以下の２点が指摘できる。第一は、自由民主主義の原理との整合性である。その集団のメンバーが、当該集団から離脱する選択肢をもたず、そのコントロールに服するような状況であれば、その集団はメンバーの自由・自律を尊重する必要から、文化の過度の強要を控える必要がある。カナダのケベック州のように、民族集団と政治共同体が重なり、その地方政府が民族集団を代表する場合がこれにあたる。他方、その集団が公的な政治権力を持たず、メンバーがこれを離脱する自由が存在する場合には、集団はメンバーの基本的人権を侵害しない範囲で、より積極的に文化復興を追求することができると考えられる。民族団体は、ある程度は公的な性格を持つ場合もあるが、文化復興の重要性にかんがみれば、個人の人権を制約しない範囲で、これを追求することに問題はないであろう。

第二は、文化に帰属することの意味をめぐるものである。ここで重要なのは、文化全体への帰属を拒絶することと、文化の特定の要素・実践を放棄したり、批判したりすることは根本的に異なるということである。コミュニタリアン系の多文化主義者であるB.パレクの理論によれば、人間は自らの帰属する文化が、自らを形作り、生き方を方向づけてくれる恩恵を認識し、それを破壊から守る責任を負う[5]。他方で、その活力を保つためにも、本質主義を避け、他の文

[5] Bhikhu Parekh, *Rethinking Multiculturalism: Cultural Diversity and Political Theory*, 2nd ed. Palgrave Macmillan, 2006; idem, A *New Politics of Identity*,

化との交流や、内部からの批判による変容をうけ入れる必要もある。文化には、音楽や工芸のみでなく、労働の倫理、親族づきあい、自然や祖先に対するかかわり方など、多様な要素が含まれる。個々のメンバーは、このすべての要素の保全に賛成する必要はないが、文化全体の存続に対しては、コミットするべきというのである。サイレント・アイヌとアイヌ民族の関係は、ひとつには、文化をめぐるどちらの関係が選択されるかによって、決まることになると思われる。

4.

つぎに、アイヌや研究者と向き合う、著者の生き方について考えてみたい。著者は、アイヌでも和人でもない、という自己認識を強く持つ。著者は一方で、出自に関する苦悩を経験しない、和人と同一視されることに強い違和感を持つ。他方で、アイヌとして生きることができないにもかかわらず、そのように期待されることで、長年苦しんできた。本書の読者は、本書の明晰な記述をとおして、このような無理解から生じる、「命を蝕む」苦痛を強く印象づけられるであろう。著者のこのような事情を認識すれば、著者の生き方について、あるレベルにおいて「理解」したことになる。

しかしながら、著者の必要とする「理解」は、このレベルにとどまるわけではなかろう。著者がアイヌや支援者との信頼関係を確立するためには、著者が「アイヌとして生きることができない」理由を、これらの人びとが、内在的に理解し、ある程度は共感し、著者の生き方に一定の敬意を持つことが必要であろう。さらに、著者の直面する問題を、社会の変革に結びつけようとすれば、この問題が、多くの人に、公共的課題として認識される必要がある。そのためには、著者の経験する困難が、著者個人のものにとどまらず、より多くの人に生じうることを、理解する必要がある[6]。

Palgrave Macmillan, 2008.

[6] ひとりの人間の実存的な選択を、全く異なる人生経験を持つ他人が、理解できる範囲は限定される。私たちは親兄弟の持つ「こだわり」の理由すら、十分に理解できないことがある。したがって、ひとりの人間の人生の特殊性や、その個性に由来する実存的決断を理解することは、不可能に近い。しかも、著者は３世代にわたって出自を隠して生きる苦悩を経験してきた人であり、このような経験をもたない読者が、その心情を理解する能力はきわめて限定されざる

著者は、28年間、和人の社会で、和人として生きてきたが、もはや和人としては生きられない理由を、次のように表現する。「アイヌの出自がもたらす痛みが永遠にまとわりつく人生のなかで、とても自分を和人であるとも思いたくなかった」(p.174)。すなわち、祖母や母は、経済的に生き延びるためにアイヌ文化をはなれざるを得ず、その痛みを感じ続けてきた。アイヌの出自を持つ親戚との交流も続いたが、親戚も家族も、アイヌのことを口に出すことを、タブーとしてきた。著者がアイヌの出自を明らかにすると、周囲の和人たちからアイヌと見なされ、あるいはアイヌとして生きることを期待されて苦しむことになる。しかも著者は、家族や祖先の感じてきた痛みを、自らのものとして引き受ける責任を感じ、また自らの出自と向き合う決心をかため、これが著者のアイデンティティの一部を形成している。これらの事情から生じる苦悩とは無縁の和人たちの集団に、著者が帰属意識を持てないことは、無理なく理解できる。カミングアウトに対する和人の友人たちの反応に著者がショックを受けたのは、友人たちが著者を、異質な他者として見て距離をとったからというよりも、「あなたがアイヌでも気にしない」(p.130) という言葉が表すように、友人たちが出自に由来する深い苦悩を理解できないことを、著者が察知して悲観したからなのではないかと、私には思われる[7]。

つぎに、著者がアイヌとして生きられない理由を考えてみたい。この理由には、いくつかのものがあげられているが、これらは消極的な理由と、積極的な理由に分けられる。消極的な理由は、著者がアイヌとして生き、アイヌの集団に同一化した経験がないということである。すなわち著者のこれまでの生活の中には、アイヌ文化がなく、これを介した、アイヌ・コミュニティとのつながりもない。親族との付き合いは存在するものの、アイヌについて話すことすら、タブーであった。それまでの人生を、和人として生きてきたため、周囲からア

をえない。しかし、上記のような必要性にかんがみて、著者の言葉の中から、あえて私が理解・共感できる部分を抽出し、了解を試みてみたい。

[7] 著者自身も、「今はアイヌの人も普通に日本人と同じでしょう」と述べた友人に対して、「そうであれば、どうして私は20年も葛藤するのだ」と反論した経験を記している (p.152)。ここで問題は「他者化」ではなく、深刻な苦悩を共有することの困難にこそあるのではないか。

イヌと見なされた体験もない。このような理由で、アイヌに対して、同一化するのが難しいというのである[8]。

著者は、このような消極的理由と並んで、「アイヌでも和人でもない」生き方に価値を見出す積極的理由もあげている。これは、著者をそだてた父、母、祖母たちの人生を引き受ける責任の感覚と結びついたものである。著者の祖母と母は、アイヌのアイデンティティをもちながら、経済的苦境から抜け出すために、アイヌ・コミュニティを離れて、和人社会に入って生きてきた。和人社会に溶け込むために、アイヌ文化からも離れた。二人はその苦悩を持つがゆえに、家庭の中でもアイヌについて語ることがなかった。祖母は厳しい肉体労働に耐え、その子供たちを高校に進ませた。母は生活費を切り詰めて、著者の教育に投資した。著者はその結果、祖母や母が望んだ高等教育をうけることができた。このように祖母と母が和人社会に生きる選択をしたことは、研究者としての著者が存在していることの前提であり、著者は二人の苦悩を引き受けることを選択する。

和人であった父とのつながりは、これにもまして、著者のアイデンティティの重要な要素である。著者の父は、「北海道開拓」を担った屯田兵を祖先に持ち、和人の立場から、北海道の歴史に向き合った知識人である。父は著者にとって、「最愛の友であり、理解者であり、そして憧れる人間」であり、「父の存在は絶大だった」(p.10)。彼は大学で沖縄学を研究し、卒業後は沖縄に滞在し、そこから北海道の独自性を考えるようになる。北海道に戻ったのち、アイヌの発行していた新聞『アヌタリアイヌ』に興味を持ち、その事業に携わっていた母と知り合い結婚する。父はその際、みずからを「侵略者の子孫」と伝え、母はその言葉で結婚を決意したという (p.155)。このように父は、和人として侵略者の祖先をもち、その歴史を背負う苦悩を引き受けた人である。研究者としての著者は、このような父の生き方に多くをおっており、著者はそれを引き受ける責任を感じるのである。

著者の両親はこのような経緯を経て、「和人とアイヌの両方の側面から、北

[8] この理由が、著者にとってどの程度決定的であるか、私には判断できない。たとえば、世界の先住民やアイヌのなかにも、文化をほんど知らなかった人が、人生のある段階で、これを自分のものにしてゆく例も多数存在するから、一般論を述べることは困難である。

海道の歴史を考える」という信念のもとに、古書店を開設する。以来、この古書店は、アイヌ民族や北海道史を研究する多くの人々の活動を支えてきたのである。著者は次のように述べる。「私の思想のルーツは、間違いなく、父と母がともに目指したこの信念のもとにある。どちらか一方を光や影にするのではなく、両方に光をあて、彩り豊かな歴史について思索することこそが、父と母と私が共有する『北海道の歴史』観である」(p.156)。すなわち著者は、アイヌと和人の両方の苦悩を持ちつつ、歴史を見つめる姿勢を、両親から引き継ぐ責任を感じるのである。「アイヌになれない理由」のうちで、私にとって、もっとも説得力があり、尊重に値すると感じられるのは、この点である。

このように、著者はアイヌとして生きることを選択しないが、これは、偏見や差別を恐れて「隠れる」ことや、「和人」になって歴史から目を背けることを意味しない。著者の姿勢は、歴史と向き合い、アイヌと和人の両方の苦悩を引き受け、現在の問題に向き合おうとするものである。前述のように、アイヌの人びとや支援者が、著者にアイヌとして生きることを期待する理由の一部が、〈アイヌの直面する困難のために連帯する〉という点にあるとすれば、著者の生き方は、アイヌとの連帯を妨げるものではないと思われる。

5.

著者の望む将来のイメージは、民族の境界線が緩やかになり、二分法が緩和される社会である。アメリカの著名人が、祖先に先住民がいたことを明かしても、ただちに「先住民」として異質なものとみなされたり、先住民らしい生き方を強要されたりしないことを、そのモデルにしている。厳格な分割線が緩み、人びとがより流動的なアイデンティティを生きられる社会が魅力的であることは間違いない。

しかし、このような社会は、混血がすすんだり、文化が希薄化したりすることで、自然に実現するとはかぎらない。かつてアメリカの社会学者 H. ガンスは、ヨーロッパ系移民の第三、第四世代において、そのエスニック・アイデンティティが、文化実践や組織とのつながりを弱め、シンボリックなものになりつつあるという仮説を提示した[9]。ところが、多くの論者が指摘するように、アイデ

[9] H. Gans, "Symbolic ethnicity: The future of ethnic groups and cultures in

ンティティのこのような柔軟化は、構造的差別によって境界が固められている集団においては起こりにくい。イタリア系、ポーランド系のアメリカ人は、これを表示したり隠したり選択できるのであるが、黒人はそのアイデンティティに閉じ込められ、ここから逃れることができない。中南米諸国においては、混血によって多様な人種集団が生まれたが、これらの間には歴然とした社会的序列が存在する。アイヌ民族においても、アイヌを「選択」することのハードルが高いことは前述のとおりであり、その背後に、このような構造的差別が存在している。意識のうえでカテゴリを緩めようとしても、背後にある抑圧的社会構造を変革することなしには、これを実現することは難しい。本書の明らかにした分断は、著者やアイヌ、支援者などの意識の変化や意思疎通のみによって、解決するものではない。むしろ、社会全体による変革の取り組みを通じてはじめて、状況は改善にむかうと考えられる。

近年、アイヌへの露骨な差別が減少したといわれるが、これはアイヌの当事者や、関係者の努力、政府の政策などが合わさって、もたらしたものであろう。他方で、近年のヘイトに見られるように、このような変化に抵抗する人々がいることも事実である。著者は、最近の高校生が、アイヌへの偏見をもたないばかりか、さらに、アイヌ差別の存在すらも知らないことに驚き、憂慮する（pp.159-160）。近年のイメージアップのキャンペーンのかげで、過去の歴史が忘却されれば、アイヌ民族の被る抑圧の多くの部分が不可視化される。著者の苦悩も、出自を隠して生きる人びとの困難の原因も理解されなくなる。アイヌ政策の意義も不明確になり、バックラッシュは容易に起こりうるだろう。取り組むべき課題は多く、未来は、すべての人々の努力にかかっている。

このような課題に向けて連帯するビジョンとして、著者が提示する２つの視点が重要であろう。第一は、実存的な体験に由来するアイデンティティを理解したり、評価したりすることの限界を認識することである。著者は次のように述べる「勝手にその痛みに違う言葉を当てはめ、痛みに優劣を与えるような行為は、当事者の痛みへの凌辱である」（p.253）。本稿では、著者や他のアクターの意識や動機を理解し、共感することを試みてきた。連帯に向けた信頼関係の確立や、公共政策の展開のためには、このような努力を続ける必要があるが、しかしこのような営為には、常に危険がはらまれていることを意識しておかな

America". *Ethnic and racial studies* 2-1 (1979).

ければならない。他者を理解する試みには、理解を試みる側の規範的な評価が混入することが避けがたい。たとえば、規範的な政治理論の立場からは、通常の分別や合理性をもつ主体を想定して、そこからそれぞれの人びとのニーズを評価し、権利や責任のあり方を論じる手法がとられる。しかし本書が雄弁に示すように、強圧的な同化政策による激変を経験した北海道において、「通常」のふるまいのパタンを想定することは不可能である。著者、アイヌの人々、支援者、研究者は、それぞれの歴史を背負って生きざるを得ず、過去や現在への思いには、越えがたい分断が存在する。それぞれが持つ「通常」「常識」の感覚が大きく食い違う。われわれは、相互理解のために努力を続けつつ、同時に、理解不可能な部分を理解できたと錯覚する可能性を忘れるべきでなく、性急に他人を裁くことを自重しなければならない。

第二は、著者の考える連帯のビジョンである。著者は、周囲とのあつれきや、苦悩にみちた模索を経て、アイヌ、和人、サイレント・アイヌが、それぞれの「痛み」を共感しあうという思想にたどり着く（pp.241-242, 248-249）。それぞれが背負う過去、それに由来するアイデンティ、「痛み」の性格は異なるとしても、これらの苦悩の源泉として同じ歴史を共有するのであるから、それぞれの「痛み」を共感し、連帯できるはずだというのである。著者が相互理解の困難に打ちのめされながらも、その試みを続ける必要を感じるのも、まさにそのためであろう。

一般に、マイノリティをめぐる運動において、内部の多様性を抑圧せずに連帯を実現するという課題は常に存在する。それぞれの利害関係やアイデンティティの差異を主題化すれば、連帯は不可能になる。この困難の克服にむけて、まずは苦悩の共通の源泉に向き合い、痛みを共感しあうという著者の解答は、私にはとても魅力的にみえる。著者のたどりついたこのような姿勢が、多くの人びとに理解されることを、願うばかりである。